

2年半の追跡調査に基づく アサーティブプログラム・アサーティブ入試の現状と課題

—多面的な評価に基づく選抜の効果とは—

企画・司会・話題提供者：岡田 佐織（ベネッセ教育総合研究所）

話題提供者：志村 知美、原田 章、福島 一政、池田 輝政（追手門学院大学）

木村 治生（ベネッセ教育総合研究所）

高大接続改革では、入学者選抜において「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」を評価することが大学に求められている。追手門学院大学におけるアサーティブプログラム、アサーティブ入試は、この改革を先取りする形で多面的な能力の育成と評価に取り組むものである。一連の取り組みの成果と課題について検証を行い、多面的な評価が大学に何をもちたらしめるのかについて議論する。

1. 入試で何を見ているのか、見るべきなのか （志村）

アサーティブプログラム・アサーティブ入試の制度設計に着手する際、受験生の観察から「本学受験生としての姿勢」を見たいと考えた。この姿勢こそが主体性の基礎中の基礎であり、その姿勢の成長段階を入試として評価している。選抜において重視する視点やプロセスについて説明する。

2. アサーティブ入試の成果と課題（木村）

学生の成長を可視化し、施策の効果を検証することは、次の打ち手を考えるうえで必須である。それでは、アサーティブ入試は、入学後の学修にどのような影響を与えたのか。「大学生基礎力レポート」（ベネッセ i-キャリア）を用いて、2年半の変化を検証した。その結果、進路意識や協調的問題解決力の高さなど、選抜で重視した資質・能力を維持しつつ、基礎学力の上昇や自習時間の増加などのプラスの変化が見られた。その一方で、入学直後に高い大学納得度や成長実感が低下するなどの課題も明らかになった。

4. 入学後の教育改革をどう進めるか（原田）

学生が主体的に学ぶことができるよう、大学としてどのような取り組みが可能かについて本学での事例を挙げながら検討したい。特に、アサーティブ入試に関する研究で明らかになっている主体性の涵養を入学前教育や初年次教育にも取り入れることで、キャリア意識を明確に持った状

態で、学生が自分自身の教育計画を立てられるようにするための方策について議論する。

4. ポートフォリオ、学生カルテのシステム構築に向けて（福島）

アサーティブ生たちは、他の入試で入学した学生よりも、学ぶ姿勢では優れていることが本調査で明らかである。ただ、成長へのきっかけが無いと、その意欲も減少していく。これは、すべての学生にも言えることと考えられる。一人ひとりの学生について、大学から見ればカルテ、学生から見ればポートフォリオになるシステムを構築していこうと考えた。その概要について紹介したい。

5. 面談がもたらす教育効果と実施上の課題（岡田）

学生カルテやポートフォリオを活用した面談を実現するため、成長プロセスを可視化した結果を活用した面談実践のプロトタイプと各種ツールの開発を行った。面談の全学実施に向けて、今後どのような課題が生じうるのか、また、その課題を乗り越えるために、アサーティブ面談のノウハウやアセスメント・アンケートデータがどのように活用できるか、他大学でも実践が可能になるヒントとなる知見を引き出したい。

6. 総括—キャリア形成・開発の視点を入試という節目にどう仕込むのか—（池田）

高校生の『キャリア成熟』を促すことの大切さが共同研究から見えてきた。その方法として、自己のキャリア形成・開発の視点からこれまでをバックキャストする自己評価の経験に着目してきた。この考え方に立つと、入試の節目までに『成熟』経験の仕込みを始めるのが、アサーティブ面談者の「面談力」のかなめだと捉えることができる。高大接続の課題として、この『キャリア成熟』の重要性と社会的意味を社会に伝えるために、アサーティブプログラム・アサーティブ入試のモデルを普及する必要がある。当日は、そのための障壁と解決策に触れ、議論の材料としたい。